

鳥取城八幡宮跡地周辺の現存遺構について

細 田 隆 博

はじめに

本稿は、弘化3年(1846)に勧請された八幡宮跡地周辺の現存遺構について報告するものである。勧請の経緯については伊藤康晴氏が前稿で詳述されているため、ここでは、伊藤氏が掲載した『天球丸御絵図面』の「八幡宮部分拡大図」に描写された内容のうち、特に八幡宮の境内を構成する石垣及び天球丸へ至る排水路の現存遺構について報告する。

1. 『天球丸御絵図面』にみる八幡宮周辺の描写

『天球丸御絵図面』の解説によれば、この絵図は、弘化4年(1847)以降の成立のようである¹。一見稚拙にも見えるが、石垣描写や建物配置とその意匠はかなり詳細に描写されている。



図1 八幡宮部分拡大図

このことから、八幡宮は、我が国の伝統的な水制工法である巻石構造²を持つ石垣が随所に用いられ、絵図にもその描写が克明に描かれている。ここでは水系に沿って、各描写について報告しよう。

まず、八幡宮境内脇水路についてである(図中①)。上流部の八幡宮後方に、蒲鉾状を呈した巻石構造をもつ堤防がある。それを伝うように境内脇石垣先の②や③で囲まれた集水施設に取り付く。また、八幡宮前面石垣の内、境内を昇降する階段両側の下半には、三日月状の天端面を呈した石垣が描かれる(図中②下)。これも巻石構造を持つ石垣の描写である。さらに、欄干を備えた木橋下の池泉は、八幡宮の神池を兼ねた集水施設であり、蒲鉾状の巻石構造を持つ堰堤で囲まれている(図中③)。通常の池泉の堰堤であれば、蒲鉾状の巻石構造にする必要はない。しかし、未曾有の豪雨時に池泉の滞留能力を超えた水が堰堤を越流した場合、堰堤天端面が洗掘、崩壊することを防ぐ為に、巻石構造の堰堤が整



写真1 八幡宮位置(☆付近)

八幡宮の立地は、標高63mの鳥取城山下ノ丸の最高地にある。伊藤氏も指摘するように、久松山西側の斜面が受けた天水を集水する水路に接している。また、この水路は、山麓に広がる山下ノ丸に流入する水路の中で、集水流域面積が最も広いもので、豪雨時には、相当の水量が八幡宮境内脇水路を通過する。さらに、境内東側の石垣は、この水路の側壁を兼ねる。

備されたと推察できよう。山側には、池泉の吐水路が設けられ(図中④)、さらにそれは、天球丸北端隅の岩盤描写の滝(図中⑤)に流れこむ。

2. 現存遺構について

上記で述べた内容について現存遺構の状況を報告する。なお、鳥取市では、大手登城路復元整備の一環として、江戸時代の排水経路を復元整備する取り組みを城内で進めている。八幡宮周辺も平成24年(2012)6月～9月にかけて、江戸時代の排水機能回復を目的に発掘調査を行い、現在、概ねその機能が回復した状況である。しかし、一方で、破損箇所等の修復が直ちに着手できないため、現状では適宜、仮設の大型土嚢等を配置し、機能を確保しつつ遺構の保全に努めている状況である。

調査及び復旧前の排水施設は、いずれも、久松山を起因とする風化真砂土が堆積しており、城が本来



写真2 発掘調査前の八幡宮周辺
水路や集水施設は完全に埋没していた。



写真3 発掘調査前の図中4の水路
天球丸へ流れる山側の水路も完全に埋没していた。

の機能を失ってから比較的早い段階で、埋没した様子が判明している。

①八幡宮境内脇水路



写真4 八幡宮境内脇水路の現状

写真4のほぼ中央のV字断面の水路が該当する。右側は、山上ノ丸に続く中坂から続く岩盤であり、左側の八幡宮石垣は、岩盤直上に築かれている。水路が集水部に取り付く部位の石垣隅角部は巻石となる。なお、絵図に描かれた八幡宮背後の蒲鉾状を呈した巻石堤防は、上流部からの堆積物などで現状では確認できていない。最も水流の影響を受ける部分でもあり、破損している可能性がある。

②八幡宮前面石垣



写真5 八幡宮前面石垣の現況

発掘調査前、写真2が示すように境内前面の下層石垣は、高さ0.75mが表出するのみであった。しかし、実際は1.8mの高さの石垣であった。

境内の石垣は、前述の水路部分同様に岩盤直上に

構築されている。矩形の隅角部になるのは、水路側の上層石垣のみだが、階段両サイドの下層石垣両端が巻石になるように築かれており、独特の景観を呈している。

③八幡宮前巻石堰堤



写真6 八幡宮前の巻石堰堤の現状

八幡宮前の池泉周辺の巻石堰堤は、二ノ丸側が良好に残っている。これは、上方からの水流が直撃しない場所に立地するためと思われる。写真6は、八幡宮階段左側の下層石垣に蒲鉾状の巻石堰堤が取り付け現況を示したものである。右側の池泉部分は現状では完全に埋没している。

一方で、天球丸側の回り込んだ部分の巻石堰堤は大部分が欠損している。にわかに残っているのが、写真5の手前に写る池泉を区画する根石部分である。ただし、これらの状況から池泉の平面規模は、6×9m程度と想定できる。

④池泉吐水路



写真7 池泉吐水路の発掘時の状況(天球丸側から)

この部位は、写真3のように発掘調査前は全くその痕跡がなかったが、発掘調査によって池泉吐水口から5.7mの区間で水路が確認された。山側は岩盤を利用した側壁で、城内側を石垣で区画している。池泉吐水口の溝底は、それ以外が岩盤の底面であるのに対して、厚さ10cm程度の扁平な石敷きが施されており、池泉底に溜まった流入土が下流に流れないような工夫が施されている(写真7中央)。

写真7手前は、溝の両側に石組になっている。これは、図1の④下にある溝を横断する石板と思われる橋の橋台を兼ねたものと思われる。

⑤滝



写真8 滝の現状

池泉吐水路から天球丸への比高差5m以上の岩盤の滝を流水が流れる構造となっている。この滝は、中央部に段を持つ2段構造で、素掘りの滝組遺構と命名することが相応しい。天球丸から遠景に眺めると、流水時はこの滝を白布のように水が流れ、その上方背後に八幡宮が鎮座する景観となり、城内でも有数の景勝地であった可能性が指摘できる。

なお、伊藤報告の「おわりに」に記された「社殿は二ノ丸を上がったところにある滝の横にあった神社で(後略)」の「滝」とは、ここで記した滝である可能性もある。

3. まとめ

八幡宮は、池田家の居城として必要な祭神として祀られたものである。その立地は、藩主御殿が復興した二ノ丸を含む山下ノ丸の最高所であり、名実ともに、象徴的な場である。それと同時に、この場所は、久松山西側斜面から集水された水が流れ落ちる場所にもあたり、適切な排水構造が求められた空間であった。その求めに応じて、この場所には巻石構造の持つ石垣が多用され、その独特な景観が生み出されと言える。これは、さらに、天球丸側にある滝の存在とも相まって、城内でも随一の景勝地であった可能性が指摘できる。さらに、前稿で佐野淳之氏が明らかにされたように、この空間にある杉が300年以上の樹齢をもつものであることも判明した。少なくとも鳥取城の山下ノ丸では最古の樹木であろう。

このように、八幡宮周辺は、鳥取城を語る上での精神性や植生さらに土木技術など、特に欠かすことができない物語が凝縮した場所とも言える。一方で、八幡宮周辺の現状は、水路機能は回復したものの、損傷した個所も多く、かつての景観美や今明らかにした価値を明示した状況とはいいいがたい。よって、今後は、これらの価値を明示し顕彰していくことが求められる。

註

- 1 鳥取県立博物館資料刊行会1998『鳥取県立博物館所蔵 鳥取城絵図集』
- 2 樋口輝久・馬場俊介1985「西日本石造文化圏における「巻石」構造物－岡山県を中心として実態調査」『土木史研究 第18号』